

「ケニア研修を終えて」

法学部1回生 鷹井 菜央

私がケニア研修に行きたいと思ったきっかけは、大学授業で木村教授がおっしゃった、「こんな教室でのんびり授業なんて聞いている場合やないで」という言葉です。若いうち、特に学生という猶予が与えられた身分にあるうちは、借金をしてでもいろんなところへ旅するべきだ。毎年世界中を駆け巡っている教授だからこそ言える名言でした。スライドに映る、木村教授がアフリカを旅したときの写真を見つめながら、「自分には見ていない世界がたくさんありすぎる。日本に閉じこもり普通の夏休みを送るのはなんて安易でもったいないことだろう。こんなことしてる場合じゃない!」と強く思い、気づけば憑かれたようにアフリカに行きたいと思うようになりました。こうして8月21日夜9時、日本出発。遅れてやってきた木村教授と、ほぼ面識のない6人の京大生とのアフリカ旅行が始まりました。

ほんとうにさまざまなことが起こった14日間でした。生で野生のトムソンガゼルを見、蜂入り蜂蜜を食べ、マンゴー農家訪問、農村での歓迎会、300人くらいの学生の前で大合唱、乳搾り、道路直し、結婚式でダンス、教会でスピーチ、らくだに乗り、ODANGO会議、ヤギの解体、スラム訪問 etc...。39、5度の熱も出しました。こんなに盛りだくさんの旅行をした京大生は私たち以外いないのではないのでしょうか。普通の夏休みを過ごしたくないという私の夢は期待以上に実現されました。これから先こんなに価値のある旅行に恵まれるかわかりません。

ナイロビ、エルドレット、ジャシヨ村、マトマイニ。どこも思い出深くて興味深かったのですが、特にわたしの印象に強く残ったのは、ジャシヨ村でのホームステイとスラム訪問です。

ケニア観光が終わってからの現地の村でのホームステイは、いよいよ本物のアフリカンライフということもあって不安になりました。しかし村の人たちは真面目でありながらも楽しく明るく私たちを受け入れてくれました。エリザベスさんの歌と踊りは今も忘れられません。私の受け入れ先はチェア - マン(村長さんでしょうか)の家族でした。子供とかけっこをしたり、日本のおもちゃでいっしょに遊んだりしているうちにすっかり打ち解けました。仲良くなったあとは、いろいろな場所へ私たちを連れて行ってくれました。小学校、教会、結婚式、池、トマト農家、などなど。どこも刺激的で毎日が発見の連続でした。毎日10キロ近く歩く旅は楽とはいいがたいものでしたが、それも含めてアフリカでの日常、アフリカでの習慣というものにじかに触れることができました。例えば彼らは、食事のとき客が料理を食べていると、皿が空にもならないうちに料理を足します。これでは料理が無くならない。私が「もう十分です」と言っても、「そんなに少ししか食べないんじゃないよ」といってやはり料理を増やします。それがむこうのおもてなしなのです。チャパティを胃に詰め込みながら、彼らとの体力の違いを思い知りました。それは観光し

ているだけでは決して知ることのできないことでした。アフリカの人々の寛大さに触れることができ本当にラッキーでした。

楽しい思い出でいっぱいのアフリカ旅行でしたが、真摯に受け止めなくてはならない現実を垣間見た旅行でもありました。スラムへの訪問です。孤児院からバイクタクシーとバスを乗りついでナイロビを移動し、高層ビルや華やかな看板のある大通りから一步奥に入ると一転、どこまでも続くスラム街が広がります。街はゴミだらけで物で溢れかえっていました。笑ってものをせがむ子供、笑わずに荷物を持つと話しかけてくる大人。ケニアの輝かしい発展の裏で、貧困に生きる人たちの現状を目の当たりにしました。しかし犯罪に手をそめず、自立して真面目に生きている人もいます。スラムで植林をしているソロモンさんは、自分が貧しいことは十分理解していましたが、今の生活に必要なものなんてない、ここから越していくことも望んでいないとおっしゃいました。わたしたちから見て貧しい生活でも、彼らにとってはそれがかけがえのない日常です。貧困とは外側から見たときの勝手なイメージに過ぎないのかもしれないと思いました。孤児院の菊本さんは、「国際協力、とくにスラムのような場所での協力は、ただ物を与えるだけでは必ず短期なもので終わってしまう。ちゃんと現地の人を理解し、友好関係を築き、彼らにお金ではない何か必要かをしっかり考えて、持続的な協力の形を考えてほしい」とおっしゃいました。私のような何も知らない大学生が生半可な考えで関わってはいけない世界なのだと思います。しかし目をそらしてはいけません。今は現状を知る、それだけでちゃんと価値のあることだったと思っています。

アフリカ旅行を通して学んだこと、それは、アフリカは私の思っていたような未開の地ではないということです。彼らは自分たちが貧しいということを十分理解し、「いつか発展してやる」という目をして、明日のために、自分たちなんかよりずっと努力していました。どこか上から目線で「貧しい彼らになにか与えてやろう」なんて考えの抜けないままの協力なんて必要ない。そんなものがなくても彼らは自分たちの手で発展していくと思います。ただ忘れてはならないのは、輝かしい発展がある裏で、貧困層はますます貧困になっていくという事実です。他国の援助なんて末端の人々には届いていない。わたしは平気で犯罪に手を染める人々を実際にみて、現実から逃げ出したくもなりました。しかしそこから目をそらしてはいけないと思います。お金ではなくて、教育の機会や人権、そういったものがこれから問われていくのだろうなと思いました。貧困だからといって、人生のチャンスは奪われない国になるためには何が必要か。答えはこの旅行の中ではまだ出ませんでした。それを考えるという人生の課題が生まれてよかったです。

A4用紙2枚には書ききれないほどの、壮絶で刺激的な体験ができた14日間でした。この体験は生涯忘れられない、自分の人生にとっての宝物になったと思います。道普請人の皆様、木村教授、現地でお世話になった人々、そして6人の大好きな友達に本当に感謝しています。ありがとうございました。